人を自由にする道具3

桐山岳大さん

もう一つの原則を言いますと、深層民主主義です。ディープデモクラシーというんですけれど。場にある、場というのは個人だったり、カップルだったり家族だったりお寺もそうですね、その場にあるすべての声が大切であるということです。

今の表層の民主主義というのは、その場があったとしたら、権力を持っている人、多数派の人が大切で、少数派の人は黙っていなさいという形で、本当の民主主義とは違うんですが、まかり通っているんですが、それも役に立たないんですね。少数派だから黙っておれと言われ、排除されたものは怒りを保って、後で爆発してテロリズムになりうる。(日本ではほとんどテロとならずに、鬱になったり、ひきこもったり、関係を切ったりとしてあらわれます)。

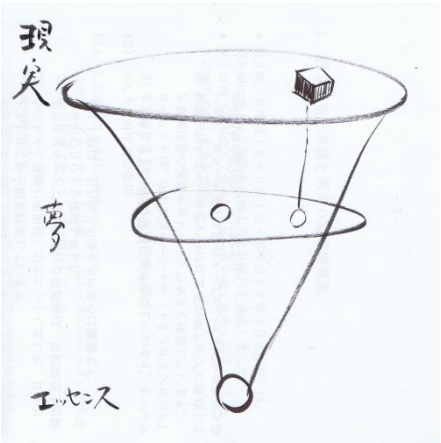
短期的に見れば前に進んでいるように見えるんだけど、長期的に見ると戻ってしまうんですね。だからその場の大きな声も小さな声も大切にして対話をしていく必要がある。お互いがある意味があるんだ、お互いがお互いを必要としている。多数派も少数派を必要としているし、少数派も多数派を必要としている。こういうアイディアを深層民主主義といいます。場にある、個人にある、家族にある、全部の声を聞いていく。お互いを聞きあっていくと自ずとどっちにいったらいいのか、あるいは今動く時期じゃないとか見えてくる。こういう考え方です。

三つ目のことは、世界は三つの構造になっているということです。

最初の次元というのは現実の次元です。この現実の次元では私たちは、私という人間なんです。でも次の夢の次元では、私というものは私とだれかになる。私というのは一つのキャラなんです。私はロール、役割。それは何かっていうと、この次元では交代することができる。例えば、何か問題があって、加害者と被害者がいたとしますね、これは本来は夢の次元からみると、全部交代可能なんです。現実の自分だけだと思っていると、交代っていうのは不可能なんです。自分は例えば犠牲者だとして、現実の次元だけなら犠牲者から抜けられないんです。夢の次元においては自分さえ役割であり、役割となるんです。

もう一つの次元はエッセンスとよんでいる次元があって、この次元は世界の源であり、種みたいなものであるというんです。この次元では、みんなはひとつであり、誰でもがだれでもなんです。ここは種、根っこで、ここから芽が出て、枝分かれして夢の次元でいくつかの自分になって、その中のある部分が現実に浮上して自分というものになっている。花だったり、実だったりするもの。夢の次元では枝だったり幹だったりする。

現実の次元、これだけが私だと思っている私が、本当は人には見せていないが、もっといくつもあるんです。母だったり娘だったり、女だったり、人を傷つけたくないと思っている人であったり、あるいは平気で蚊をぶち殺したりする人もいるわけですよ。それらの自分は、夢の次元には確実に存在している、だから、たくさんの自分がある。その自分になる前の、何かこう源のような自分。そこから全部枝分かれしている。現実の次元では自分は一人だと思っているけれど、夢の次元では多様な自分。ここではすべての人は交代することができる。エッセンスの次元まで行けば、誰でもがひとつということ。世界がそんなふうになっているというこれは一つの世界への観方です。

私たちは本当は既知と未知とエッジに移動する可能性があって、本来は私たちは既知と未知を行ったり来たりしているはずなんです。

ところが私たちはこの現実、既知の中でぐるぐる回っている。そこに囚われて囲われている。(続)